企画制作：北海道新聞社広告局

北海道科学大学　開学50周年記念シンポジウム

北海道を科学の力で切り拓く

主催：北海道科学大学　共催：北海道新聞社　後援：北海道、札幌市、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、小樽市、網走市、幕別町、新ひだか町、上富良野町、猿払村、北海道科学大学同窓会・北海道工業大学同窓会「雪嶺会」

今年開学50周年を迎えた北海道科学大学は、去る11月12日、札幌パークホテル（札幌市中央区）で「北海道科学大学 開学50周年記念シンポジウム」を開催。コーディネーターをUHB北海道文化放送のキャスター松本裕子氏が務め、「科学」をキーワードに外交、バイオ、IT、教育など各分野の専門家が登壇し、今後北海道が発展・成長するために何が必要か議論を交わしました。約900名の参加者たちは、登壇者の発言に熱心に耳を傾けていました。

［コーディネーター］
松本 裕子 氏
UHB北海道文化放送
キャスター

地域特性を生かした独自のものづくりを

私の住む伊達市でも少子高齢化が深刻な問題になっています。そんな中、道の駅「だて歴史の杜 伊達市観光物産館」が注目されています。平成24年にリニューアルし、5年間で入場者数が約3倍、売上額は道内の道の駅で1位。観光のまちではない伊達市が全道有数の道の駅となりました。その理由の一つは、市民が出資し「（株）伊達観光物産公社」を設立したこと。行政や第3セクターに頼るのではなく、危機感を持って収益を追求しています。もう一つは、伊達の野菜をメーンに売り出したこと。伊達では約170種類もの野菜が栽培されていますが「スター選手」となる野菜がありませんでした。それを逆手に取り、駅内に小ブースを設置し70軒以上の農家に開放したことで、農家間に競争が生まれました。小規模農家が希少価値の高い野菜を生産し、パッケージや販促ポップなども工夫を凝らし、個々にブランド化を図りました。農協の下請けだけでなく消費者に直接販売する楽しみや気概が生まれることが重要だったと考えます。北海道経済は、国からの補助金頼りの施策の歴史をたどってきました。しかし今は民間が地道に利益追求し、地域特性を活かしたものづくりを進めることが重要だと考えます。

小松 幸雄 氏

小松建設株式会社 代表取締役

伊達市出身。1982年北海道工業大学（現 北海道科学大学）を卒業後、フォークグループ「手風琴」を結成し同年全国デビュー。一級建築士のシンガーソングライターとして数年間の音楽活動を経て、ふるさと北海道に戻り父が経営する小松建設（株）に入社。1992年代表取締役に就任、現在に至る。現在、北海道科学大学客員教授も務める。

若者と高齢者の力を社会の力に

北海道の現状について自分なりに調べた結果、少子高齢化による企業の人手不足が一番深刻な問題と感じています。このままでは若者や現役社会人が高齢者を支えるには限界が来るでしょう。しかし、少子高齢化をプラスに捉え、若者の力で高齢者が働きやすい社会を作ることが大切だと思います。例えば、多くの高齢者が「働きたい」という意思を持っているにも関わらず、非正規雇用が多いという現実があります。企業の人手不足緩和のためにも、高齢者の正規雇用を増やすことが大切で、高齢者と僕たち若者が手を取り合って社会を作っていくべきと思います。僕は卒業後、就職で北海道を出るため、北海道が抱える少子高齢化や人手不足問題を考えると心苦しいものがありますが、大切なのは行った先で何をするかです。明確な目的を持って北海道を離れ、そこで活躍することで「自分は北海道で学んだ人間だ」と胸を張って伝えられます。それによって、北海道出身者や北海道そのものに良いイメージが広がっていくはずです。後輩たちには、北海道の第一線で活躍する方がどんな経験をしているのか学生のうちに知り、自身の進む道を決めてほしいと思います。

吉尾 鷹哉 氏

北海道科学大学 未来デザイン学部 メディアデザイン学科 4年生

1995年生まれ、石狩郡当別町出身。大学ではデジタルコンテンツに関する総合的な知識を学ぶ傍ら、昨年度まで北海道科学大学のジャズサークルである、サニーフィールズ・ジャズ・オーケストラの部長を務める。2017年度入学式では、応援団長として新入生を激励。趣味は音楽鑑賞。

逆転のシナリオを描く研究と人材育成を推進

北海道には多くの問題が山積していますが、こういう時代だからこそ従来の仕事の枠組みを超え、自由な発想で新たな仕事を生み出すチャンス。札幌圏のように寒く、積雪が1㍍を超える厳しい環境で200万人以上が住む地域は世界中に例がなく、いわば私たちは「積雪寒冷地のトップランナー」です。積雪寒冷地ならではの考え方や生活の技術を国内外に発信することで、新たな産業が生まれる可能性もあります。北海道にはこうした「逆転の発想」でピンチをチャンスに変えるシナリオが必要で、そのシナリオを描き、実践できる人材を育成するのが本学の使命と捉えております。北海道の発展・成長のためには、官依存から脱却し民力を活性化させることが重要で、多分野での連携が求められます。本学では学部学科横断型の4つの研究所を開設し、企業と連携し地域に密着した異分野の連携を強化しています。その一つが噴火湾産ホタテの貝殻を使った高性能の壁材です。小松建設様と本学との共同研究で開発し全国展開しています。こうした産学共同研究に携わる学生が、地元企業に就職するサイクルの構築を図りたいと思っています。これからも、本学では科学の力とフロンティア精神を大切にし「地域に貢献できる人材の育成」と「地域密着型の研究」に注力していきます。

苫米地 司 氏

学校法人北海道科学大学 理事長
北海道科学大学 学長
北海道科学大学短期大学部 学長

青森県六戸町出身。工学博士。1976年北海道工業大学（現 北海道科学大学）を卒業、同年から同大学助手として教育・研究に従事する。2010年に副学長、2011年から学長を歴任し、2017年9月からは学校法人北海道科学大学理事長に就任。主な研究分野は雪氷工学で、広大な積雪寒冷地である北海道が抱える諸課題に取り組む。その功績が認められ、2015年度北海道科学技術賞受賞。

科学の総合力で新たな道を拓け

私たちの北海道は、少子高齢化が進み、人口も減って厳しい状況に置かれています。その一方で、北の核・ミサイル危機に直面し、ロシアとは領土問題を抱え、中国の海洋進出にもさらされ、国際政局の最前線に立たされています。こうした中で、我らが北海道は将来に向けてどこに舵を切っていけばいいのでしょうか。それを考える上で参考になるのが、1960年代、気鋭の人類学者、梅棹忠夫氏が掲げた「北海道独立論」です。中央政府に頼らずに独自の産業文化を持て！この呼びかけは、今も光輝き、北の大地の未来に貴重な示唆を与えてくれています。北海道が独自の産業を育むべき分野は民間にあり――。いまや世界のトップランナーとなった競走馬の牧場、ノーザンファームは、創立時から1円も国の補助金を受け取らず、競走馬の育成、市場、競りのあらゆるシステムを変革し、自前で未来を切り拓いた先覚者です。これからの北海道は、自ら新しいマーケットを創造し、人材を育てることが重要であり、慎重と大胆な発想、科学的な思考こそが、新しい社会システムの「解」を見つけだす武器なのです。北海道の未来を拓くには、より巨視的な英知が求められます。先人たちは開拓者精神で荒野を切り拓きましたが、戦後の北海道には真のフロンティア精神が欠けていました。北海道科学大学が、文理を超えた英知を集積し、新しい構想を打ち出す役割を期待しています。

手嶋 龍一 氏

外交ジャーナリスト・作家（元NHKワシントン支局長）

芦別市出身。NHKワシントン支局長として9.11テロに遭遇し、11日間の連続中継を担う。NHKから独立後に発表したインテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』、姉妹篇『スギハラ・ダラー』は50万部の大ベストセラーに。2016年11月、現代史を彩るスパイたちの人間味溢れるストーリーを描いた『汝の名はスパイ、裏切り者、あるいは詐欺師～インテリジェンス畸人伝』を上梓した。現在は、大学や研究機関で外交・安全保障を中心に後進の指導にも取り組んでいる。

農業の高付加価値化で国に依存しない北海道へ

北海道の発展の鍵は「高付加価値化」。弊社は植物の生育調整材を製造しながら、通年で事業展開可能な機能性食品事業を行っています。農水産物の未利用資源から取り出した機能性成分を活用しているため、低い原価率と高い付加価値を実現し発展を遂げてきました。北海道は全国と比較して商品の付加価値率が低いため、産学官が連携し、一次産品の高付加価値化の推進が必要だと考えます。また、バイオ産業をはじめ、北海道はスマート農業や宇宙開発、IoT産業への挑戦など、個々で見ると素晴らしい技術や企業がある一方、下請け企業が多い。今後は産業・企業が枠を超えて連携し、北海道で完結できることが大切です。こうした産業の付加価値率を上げることで、北海道は自立できると考えます。また、産業の拡大を支えるグローバル人材の育成も必要です。これまでの公共事業依存により、北海道は廃業率が高く開業率が低いという課題があります。弊社では、起業家精神のある学生を金融面・人材面で支援しようと取り組んでいます。大学・社会が若者に刺激を与えて起業家を育成し、新たな事業を生み出していくことが重要と考えます。

小砂 憲一 氏

株式会社アミノアップ化学 代表取締役会長

札幌市出身。1969年酪農学園大学を卒業、1977年に北海道飼料研究所を創業。植物生育調整剤「アミノアップ」を商品化し、1984年（株）アミノアップ化学を設立、代表取締役に就任。2009年には同社代表取締役会長に就任、現在に至る。北海道経済連合会副会長、北海道バイオ工業会代表理事会長など、北海道経済界の要職を務める。

ベンチャー・起業家が地方都市を支える

現在の北海道はミッション無きパブリックマネジメント（公共経営）が課題と考えます。炭鉱閉鎖後、観光業で失敗した夕張市の経済破綻に代表されるように、今のままでは北海道経済は長期的に縮小してしまう運命にあるため、向こう50年の新たなミッションを打ち出し、根本的に変革せねばなりません。産業の発展には、ベンチャーや起業家が起こすイノベーションが不可欠です。そこで、産業そのものに投資するのではなくベンチャーや起業家に投資し、新しい発想を持つ若い世代がイノベーションを起こしやすいエコシステムを作るべきだと考えます。世界的なベンチャー企業が生まれ続けているシリコンバレーの発祥は、アメリカの地方大学であるスタンフォード大学。しかし、日本では起業家を志す学生は少ないのが現実です。地方大学からベンチャーや起業家を輩出するために解決しなくてはならない課題は2つあり、一つは日本の地方大学生にとってベンチャーや起業家・投資家との距離が遠い点。もう一つは学生が卒業後、地元に残りたいと思えるようなモチベーションコントロール。北海道科学大学には、こうした課題をクリアしながら、手稲前田を中心にシリコンバレーのようなイノベーション発祥となる地域づくりを願っています。

坪井 大輔 氏

株式会社INDETAIL 代表取締役

札幌市出身。2000年北海道工業大学（現 北海道科学大学）を卒業。小樽商科大学大学院アントレプレナーシップ専攻MBA取得。ソフトウェア開発会社で開発経験を積んだ後、（株）スタッフアイへ入社し札幌支社長就任。2009年に（株）INDETAILの前身、アイテック北海道を設立。2017年9月より北海道科学大学客員教授も務める。

北海道の未来を、
真剣に考える人がいる。

2018年4月、北海道科学大学は北海道薬科大学と統合し、4学部と短期大学部の合計14学科へ。
北海道No.1の実学系総合大学の実現に向け、学科の垣根を越えたより高度な学びを実践していきます。

北海道科学大学　工学部／機械工学科　情報工学科　電気電子工学科　建築学科　都市環境学科
薬学部／薬学科（2018年4月開設）
保健医療学部／看護学科　理学療法学科　義肢装具学科　臨床工学科　診療放射線学科
未来デザイン学部／メディアデザイン学科　人間社会学科

北海道科学大学短期大学部　自動車工学科

2018年度入試日程　北海道科学大学・北海道科学大学短期大学部 共通　返還義務のない特待生制度『スカラーシップ制度』対象

入試区分	出願期間	試験日	試験場	合格発表
一般入試［前期］	1/5（金）～1/19（金）〈書類1/22（月）必着〉	2/1（木）・2/2（金）	札幌（本学）、旭川、北見、帯広、釧路、函館、青森、秋田、盛岡、仙台、東京	2/14（水）
大学入試センター試験利用入試［前期］ ※短期大学部は除く	1/5（金）～1/23（火）〈書類1/24（水）必着〉《一般入試［前期］と併願》1/5（金）～1/19（金）〈書類1/22（月）必着〉	大学入試センター試験 1/13（土）・1/14（日）	本学独自の試験は行いません	

+Entry 北海道科学大学は、完全NET出願！　願書の取り寄せ不要　24時間出願・支払い可能
※後期日程およびNET出願については、ホームページ・学生募集要項等でご確認ください。

北海道科学大学 +Professional
〒006-8585 北海道札幌市手稲区前田7条15丁目4-1
TEL: 011-681-2161（代表）　FAX: 011-681-3622
HP: www.hus.ac.jp

学校法人北海道科学大学
北海道科学大学短期大学部
北海道薬科大学
北海道薬科大学附属薬局
北海道科学大学高等学校
北海道自動車学校

北海道科学大学 開学50周年